

## 第17話 国運の進歩

領土が<sup>ひろ</sup>拡がり、国防が<sup>ととの</sup>整い、大いに<sup>ちやうそく しんぼ</sup>経済界も活躍を<sup>ざいせい ぼうちやう</sup>来たすと共に、一般の文化も<sup>たがく こくさい ま</sup>長足の進歩をする。しかし、財政の膨張はにわかに多額の国債を増させる。

### 軍人に勅諭を下される

領土が<sup>ひろ</sup>拡がると共に国防のことも年を追ってますます<sup>お</sup>整った。明治5年12月に国民皆兵の制が定められて、武士という<sup>かいきゆう</sup>特別の階級がなくなった事はすでに前に述べたが、同15年1月4日、天皇は特に勅諭を下して、軍人は<sup>ちやくゆ</sup>忠節をつくすのを<sup>ほんぶん</sup>本分とし、<sup>れいぎ</sup>礼儀を<sup>ただ</sup>正し、<sup>ぶゆう</sup>武勇を<sup>とうと</sup>尊び、また<sup>しんぎ</sup>信義を<sup>おも</sup>重んじ、<sup>しつ</sup>質素を<sup>そ</sup>主とすべく、これを<sup>しゆ</sup>つらぬくに<sup>しせい</sup>至誠をもって<sup>むね</sup>すべき旨を示された。ここにおいて軍人の<sup>ととの</sup>守るべき道も<sup>ぐんたいきやういく</sup>明らかとなり、<sup>ほうしん</sup>軍隊教育の方針も<sup>かいりく</sup>しっかり立って、<sup>ぐんび</sup>海陸の軍備も<sup>ととの</sup>だんだんと整った。

### 国防が整う

こうして<sup>このえへい</sup>陸軍は、日清戦争の時には<sup>しだん</sup>近衛兵共に7個師団であったのが、その戦後の明治29年には13個師団となり、更に日露戦争中に4個師団を増設し、戦後の明治40年10月に2個師団を新設して、すべて19個師団となった。又、海軍は、明治7年に<sup>ていとくふ</sup>提督府を置き、後、<sup>ちんじゆふ</sup>鎮守府と<sup>あらた</sup>改めたのが、<sup>ぞうか</sup>増加して4個鎮守府となり、<sup>ちんじゆふ</sup>軍艦も、日清戦争の時には、約六万トンに過ぎなかったのが、日露戦争前に約二十六万トンとなり、その戦後には更に増して五十万トンを超え、国防の<sup>こ</sup>実がいよいよ<sup>よ</sup>備わって、わが国は<sup>れつきやう</sup>能く<sup>かた</sup>世界列強と肩をならべるに至った。

### 経済界の進歩

かかる間に、<sup>けいざいかい</sup>経済界も<sup>しんぼ</sup>すこぶる進歩した。<sup>こと</sup>殊に改正条約が<sup>かんぜい</sup>実施され、<sup>かいてい</sup>関税が<sup>がいこく</sup>改定されてからは、<sup>ぼうえき</sup>外国貿易は<sup>めんぼく</sup>全く<sup>きいと</sup>面目を<sup>きぬおりもの</sup>一新して、<sup>めんし</sup>さかんに<sup>ゆしゆつ</sup>生糸、<sup>めんか</sup>絹織物、<sup>てつざい</sup>綿糸などを<sup>ゆにゆう</sup>輸出し、<sup>ゆにゆう</sup>綿花、<sup>ゆにゆう</sup>鉄材などを輸入した。かつては<sup>げんりやうひん</sup>原料品の<sup>せいひん</sup>輸出が多く、<sup>せいひん</sup>製品の輸出は<sup>せいひん</sup>少なかったが、日清戦後からは次第に原料品の輸入と製品の輸出とが多くなって来た。<sup>こうぎやうかい</sup>大いに<sup>はつたつ</sup>工業界が発達したためです。<sup>のうぎやうほうめん</sup>農業方面も<sup>がくり</sup>また<sup>おうよう</sup>学理が<sup>おうよう</sup>応用され、<sup>こうちせいり</sup>耕地整理なども<sup>さんかく</sup>行われて、<sup>ぞうか</sup>産額も<sup>ひんしつ</sup>増加すれば<sup>かいりやう</sup>品質も改良された。

また、<sup>かへい</sup>貨幣の<sup>せいど</sup>制度について、前にも<sup>だかん</sup>(文明の<sup>せい</sup>発達の話)で述べたように、<sup>もう</sup>兌換の制が<sup>せい</sup>設けられてから、<sup>ぎんか</sup>も<sup>しへい</sup>つばら<sup>ひ</sup>銀貨をもって<sup>か</sup>紙幣と<sup>あた</sup>引き換えて<sup>つね</sup>来たが、<sup>へんどう</sup>銀は<sup>いちやう</sup>価が<sup>ほんいかへい</sup>常に<sup>てき</sup>変動して<sup>てき</sup>一様でなく、<sup>てき</sup>本位貨幣に<sup>てき</sup>適しなかつたので、明治30年10月、<sup>しんこく</sup>ちやうど<sup>しょうきん</sup>清国から<sup>きかい</sup>償金を受け取る<sup>きん</sup>ことになったのを<sup>きん</sup>機会として、<sup>きん</sup>政府は<sup>かほんい</sup>金貨本位に<sup>かほんい</sup>改めた。

### 交通通信の機関が備わる

貿易が<sup>しやうせん</sup>さかんに<sup>おもむ</sup>なるにつれて、<sup>しやうせん</sup>商船で<sup>ゆうせん</sup>遠く海外に<sup>ゆうせん</sup>赴くものも多く、明治29年にはすでに日本郵船会社の<sup>がいしや</sup>欧州<sup>こうろ</sup>航路、<sup>こうろ</sup>米国<sup>ていき</sup>航路、<sup>かいうん</sup>豪州<sup>ぎやう</sup>航路をはじめ、<sup>ぎやう</sup>その他の<sup>ぎやう</sup>諸会社の<sup>ぎやう</sup>定期航路も<sup>ぎやう</sup>開けたりして、<sup>ぎやう</sup>海運の業も<sup>ぎやう</sup>大いに<sup>ぎやう</sup>進んだ。

又、内国の<sup>りくじやうゆん</sup>陸上<sup>きかん</sup>運輸機関である<sup>てつどう</sup>鉄道も<sup>てつどう</sup>ますます<sup>てつどう</sup>開け、明治21、2年ごろにはすでに<sup>すやう</sup>全国の<sup>すやう</sup>枢要な<sup>すやう</sup>都

## 第17話 国運の進歩

市はみな鉄道によって連絡された。その中には私設のものもすこぶる多く、明治28年には全国鉄道開業線2290マイル余のうち、約7割4分に当たる1697マイル余は私設鉄道が占めていた。しかし、政府はもともと鉄道国有主義を国家の方針としていたので、幾度か議会で私設鉄道買収法案を提出した後、ついにその協賛を経て、明治39年3月31日に鉄道国有法を公布し、私設鉄道の主なものを買収して国有とした。この外、軽便鉄道、電気鉄道なども次第に発達した。

通信事業もますます進歩を遂げて、郵便、電信、電話は勿論、後には無線電話も利用されるようになり、万里の外からも忽ち音信が取りかわされた。

### 学芸が大いに興る

学問も教育もますますさかになって、西洋の学術を習うのみならず、医学、生物学などでは往々にして我が研究が却って彼れをしのぐものも出て来て、外国人で研究、観察のために我が国に来るものも少なくなかった。

文芸については、俳句に正岡子規が出て、一派を開き、和歌に落合直文が出て革新の機運を起こした。小説には尾崎紅葉、幸田露伴、が相並んで文壇の明星と呼ばれ、江戸文学に基づいて新しい作品を出した。又、さきに『小説神髓』を書き、『当世書生気質』を出して明治文学の発生を促した坪内逍遙および森鷗外などが、しきりに西洋文学を紹介したところから、東西の文学は次第に融和して、新しい日本文学を生み出すに至った。又、二葉亭四迷が『浮雲』において、山田微妙際が、『夏木立』、『胡蝶』その他において、いづれも言文一致の新文体を創始し、以って、今日の口語体の基礎を据えたことも忘れてはならない。芝居も、従来の歌舞伎の外に、西洋劇などもおいおい演じられて、新旧相交じって発達したが、活動写真（注：映画の旧称）もまた大に行われて、一般の娯楽となった。

### 美術工芸の発達

又、美術の方面を見ると、一時、西洋文化にかぶれすぎた反動として起こった国粹保存の声が、広く国民の間に伝わるにつれて、日本画家は競って古来の諸流派の画法を研究するようになったが、なおその上に、洋画の長所も取り入れたりして、しきりに新しい画風を開いた。一方、洋画もまた黒田清輝らが久しくこれをフランスに学んで帰国し、大いに世にすすめると共に、美術学校にも洋画科が設けられたので、新進の作家が次第に現れるに至った。

彫刻には高村光雲らが出て、わが固有の彫刻を早くから洋風の技術と融和させて、いちじるしい発達を見せた。この外、建築の法、染色の術、陶器、漆器の製作などに至るまで、いづれも洋風を取り入れて、長足の進歩を見せた。殊に明治40年にフランスのアカデミーなどに倣って文部省美術展覧会が開かれるようになってからは、民間にもまた美術に関する諸団体が起り、官民相俟ってますます美術、工芸の進歩を助けると共に、またその趣味を広く世に弘めた。

### 国費の膨張

こうして、短日月の間に国勢は発達し、民力は伸長し、文化もまた大いに進歩したが、それと同

## 第17話 国運の進歩

時に、一方では国費を要することがますます多く、わが国の財政は年ごとに膨張した。国債の如きも、日清戦争の明治26年度末には、二億六千万円余に過ぎなかったのが、日露戦争前の36年度末には五億六千万円余となり、日露戦後の38年度末には一躍二十一億円以上にのぼった。しかも、戦後の経営はますます積極的なことを要したので、財政は一層困難とならざるを得なかったのです。煙草や塩の専売の始まったのもこのころで、要は財政を補おうとしたのです。

### 戊申詔書

しかし、国民の一般は戦勝にほこって漸く奢侈遊惰に流れて、所謂成金を夢見て一攫千金の投機を試みるものさえ到るところに続出した。人々はますます堅実の風を失い、世間には浮華の俗のみが滔々としてみなぎった。

天皇は深くこれを憂えられ、すなわち明治41年10月13日、畏くも以下の詔書を下して、この弊風を戒められた。

朕惟うに、最近の文化は、日に就り月に将み、東西が相倚り彼此一緒になり、それでその福利を共にする。朕はここに益々国交を修め、友誼を惇くして、列国と共に永くその慶に頼らんとする。願みるに、日進の大勢に伴い、文明のうるおいを共にして国運の発展を待つ。

戦後の日がなお浅く庶政を益々強くする必要があるのである。

よろしく上下心を一にして、忠実に業に服して勤儉で産を治めよ。

そのためには、惟れ信、惟れ義、人情の厚さは俗を成し、華を去り実就いて、荒さと怠けを相誡めて自ら努めて休まないようにせよ。

抑々我神聖なる祖宗の遺訓と我が光輝ある国史の実績とはあきらかに炳として日星の如し。

実際に克く恪守し、努め励んでその誠をすれば、国運発展のもとは近くに在る。

朕は現在の世局に処して、我が忠勇なる臣民の協翼にたよって、維新の皇猷を恢弘し、祖宗の威徳を対揚せんことを庶幾う。爾臣民共に克く朕が旨を体せよ。

これから勤儉（注：節約）の聲がさかんにおこって、うわついた浮薄の風は次第に影を潜めるに至った。たまたま明治41年は干支が戊申でしたから、この詔書を戊申詔書と言います。さきに下された教育勅語と共に、我々臣民はあつくこれを奉体して、つねに実践躬行の鑑とし、以って祖先の威風を顕彰しなければならない。

### 慈善事業が起る

天皇はまた、病気に罹っても治療することの出来ない貧民のあることを哀れに思われ、明治44年2月11日、特に手許金百五十万円を下して貧民救療の費にあてられた。すなわち内閣総理大臣桂太郎は、謹んでこの聖旨を奉じて済生会を起こした。皇后もまた慈愛のみ心が深く、つねに救護の事業を保護された。従って民間にも博愛慈善の事に心を用いるものが多く出て、孤児院、養育院、

## 第17話 国運の進歩

せりょういん かんかいん せつび しだい ととの ふこう どうほう きゅうさい みち そな  
施療院、感化院などの設備も次第に整い、不幸な同胞を救済する途もだんだんと備わった。

( 第17話 国運の進歩 終わり。次は前頁に戻り、第18話 明治天皇の崩御と大正天皇の即位 )